

# 建築家・藤井厚二が求めた「日本の住宅」の美意識

—日本の生活文化と気候風土—

松隈章

Aesthetic Sense of 「THE JAPANESE DWELLING-HOUSE」, Quersted by an Architect Koji Fuji

Akira MATSUKUMA

-The Japanese Life Culture and Climate-

## はじめに

京都帝国大学で環境工学を自ら興し、教鞭をとりながら、「日本の住宅」の設計に専心した建築家・藤井厚二（写真1）は、恵まれた家庭環境や自然環境のもとで育まれた鋭い審美眼によって、彼の生きた時代のあらゆるものを吸収し、考察・論考・実践していった。それらは、まさに「時代の潮流」と「先人」との出会いから生まれたものである。藤井が完成形として残した自邸「聴竹居」・昭和3（1928）年築と幾つかの資料から藤井が終生求めた「日本の住宅」の美意識を探る。



写真1 藤井厚二

## 1 環境共生住宅の理論書「日本の住宅」と実践「聴竹居」

### 【「聴竹居」の概要 ランドスケープからディテールまで】

今から80年ほど前に完成した藤井厚二の代表作である自邸「聴竹居」について以下概説する。その前に、「聴竹居」という名前はどこからつけられたのだろうか。藤井が自ら記したものの中から、その経緯となるものは見つかっていない。

花人の西川一草亭（後述）の編集した機関誌「瓶史」の昭和6年陽春号に一草亭が次のように記している。「聴竹居は藤井厚二博士の雅号なり、京都の郊外山崎天王山の山麓、眺望絶佳の地に新居を構え、京都大学に専門の建築学を講ぜられる余暇、自ら陶器を焼き、茶の湯の趣味を解し、插花を研究し、生活の向上と美化に意をもちいておられる様である。」と（写真2）。

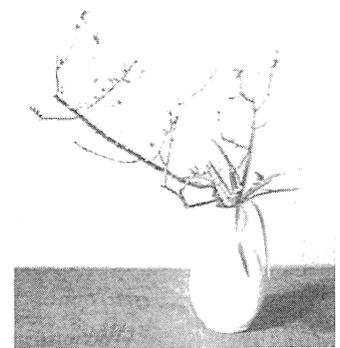


写真2 藤井聴竹居 插花

敷地の周辺は竹林だったことが、当時の地図からわかっている。その「竹」の音を「聴き」、家族とともに和敬静寂を愉しむ住居（自邸）を藤井は造ろうとしたのであろう。その住居の名前が藤井自身の「雅号」でもあったのである。

### ランドスケープ

藤井自身の残した大山崎一帯の壮大なランドスケープの設計図やスケッチは残念ながら見つかっていない。実測図集をまとめた際に、ランドスケープについて、実際にそこで暮らした小西章子氏・伸一氏にヒヤリングをして作成したのが図1である。

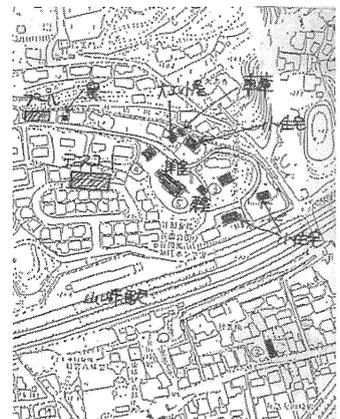


図1 ヒヤリングによる各施設配置予想図

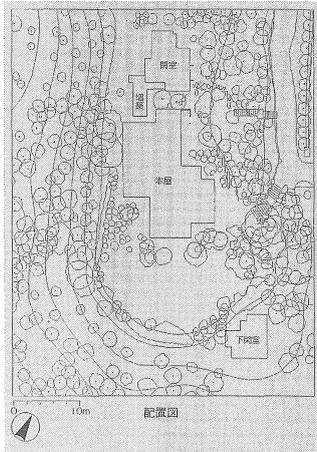


図2 配置図



写真3 アプローチ

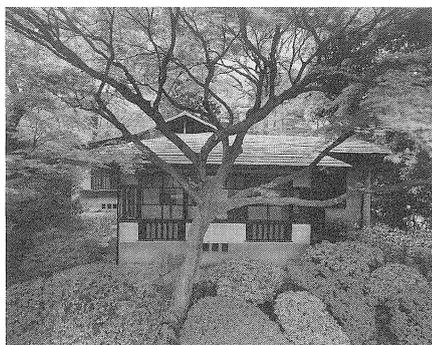


写真4 本屋

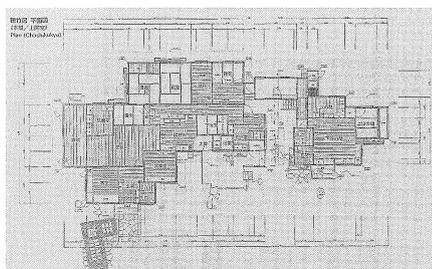


図3 平面図 (本屋及上閑室)

藤井は1万坪を越える大山崎の土地を購入し、第3実験住宅、第4実験住宅、そして第5実験住宅「聴竹居」、その他にも、いくつかの小住宅やテニスコート、プール、窯などを整備していったことがわかる。現在は「聴竹居」以外には何も残っていないが、それらはまさに、小能林氏の言う「コロニー」<sup>1</sup>であり、堀越哲美氏の言う「分譲住宅あるいは住宅展示場」<sup>2</sup>であったのだろう。

### 建物配置

現在の第5実験住宅「聴竹居」には、3棟の建物が配置されている(図2)。住まいの中心となる「本屋」、その北側に隣接した藤井の書斎・アトリエとして使われた「上閑室」、そして、少し下りた所にある藤井の茶道・陶芸等、趣味を通じての社交の場だった「下閑室」である。本屋と上閑室は昭和3年にほぼ同時に建てられ、下閑室は2～3年遅れて建てられている。本屋は広大な敷地の中でも最も見晴らしの良い、言わば岬にたとえると、その突端に位置している。平地の少ない中で、雁行させながら、東西に長く南面した居室を、それまでの実験住宅での暮らし心地から平屋が良いという結論から平屋建てで構成している。そこを訪れるものは全面道路からは緩やかに右にカーブした石段を登っていき、一旦、見晴らしの良い南方向を眺めた後、折れて玄関に至る(写真3)。シークエンスを十分に考えたアプローチである。また、本屋の南側には絶景を見晴らす芝生の庭が広がり、そのまま斜面となってその先は国鉄の線路へと繋がっていた。

### 本屋(写真4)

本屋は、南北に細長く雁行したプランをもつ居室(居間)を中心に、客室(客間)、食事室、調理室、縁側、読書室等生活の公の部分が配置され、その奥に中廊下に面して私的な寝室、浴室、便所、納戸等がある(図3)。玄関を入ってすぐに客室や客用の便所を設けている。それは客の使用する部分を可能な限り減らし、家族のための居住空間を大きく取りたいとの意志の表われである。

本屋の中で、特に注目すべき部屋としては①最もデザイン密度が高く、和と洋の要素が凝縮された空間の客室、②中心に位置し、一段上がった三畳の畳間や1/4円によって緩やかに間仕切られた食事室と繋がる居室、③三川合流を望む大パノラマを実現し、さらに、室内の熱環境の緩衝帯となるベランダとサンルームの機能を持った縁側があげられる。

### 客室（写真5）

客室で使われている木、竹、紙は日本の伝統的な材料、様式としては椅子式の洋風、床の間という和の空間要素、それらが絶妙のバランスで融合されている。

床の間は椅子式に対応し目線を意識した高さが採用され、2つが組み合わされている。ひとつは、ソファ横の小さな床が玄関から引戸をあけて入った時に目にとまる位置にある。さらに、ソファや椅子に座った時に眺める大きな床がある。その部屋全体を照らす和紙張りのモダンな照明器具は同時に裏側の床に光を当てるよう工夫された床照らしでもある。ソファと小さな床との間に設けられたスクリーンは、目の美しい杉板柃目とソファからの目線を遮らない位置に設けられた細い竹のたて子そして竹の床柱で構成されている。

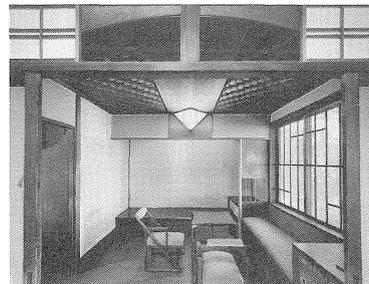


写真5 客室

### 居室（写真6）

南北に細長く雁行させている理由のひとつは西風の多いこの土地の特徴において風通しを良くするためである。いまひとつは自身の著書「床の間」<sup>3</sup>の中でも述べているが、平面によって区画した種々の凸凹のある空間を作ることによって、四角四面で単調になるのを防ごうとしたからである。

一段上がった三畳の畳間は、腰掛式と座式の目線を合わせるための工夫として、「聴竹居」以前の実験住宅でも導入されている。ここでは同時に段差を利用して、夏季に地中を通った涼しい外気を取り入れるための導気口(今で言うクールチューブ)（写真7）が設けられている。

居室と食事は平面的に45°の角度で連続しており、その境界は、1/4円の大膽なデザインをした間仕切りで緩やかに区切られている。その間仕切り横の壁面には、マッキントッシュのデザインを模し壁に埋め込まれた時計、神棚、そして和の違い棚の要素を洋風にしつらえた絶妙なデザインセンスの飾り棚が設けられている。



写真6 居室



写真7 クールチューブ

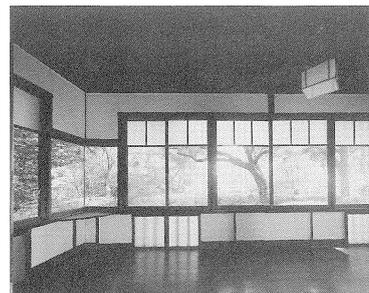


写真8 縁側

### 縁側（写真8, 9）

ここでは雄大な三川合流（桂、宇治、木津の三つの川が合流し淀川となる）を望む大パノラマを獲得している。それは①嵌め殺しガラスの付き合せコーナー部分の方立てを細くする②軒をはね木で持たせることによって柱をなくす③透明ガラスとすりガラスを組合せにより室内から余分なものを見せない視線操作によって実現されている。さらに夏の暑さと冬の寒さを同時に和らげる工夫が施されている。夏は「ベランダ」として庇によって直射日光を防ぎ、居室との間の引き戸を閉じた上で換気

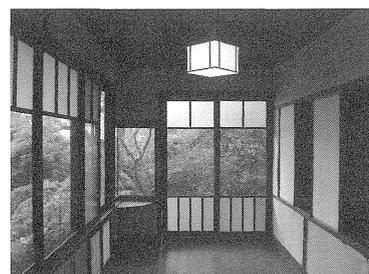


写真9 縁側

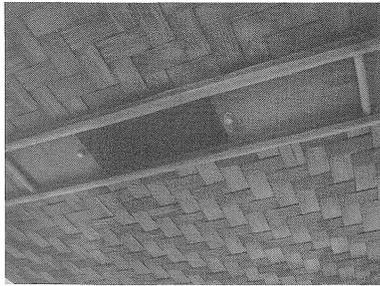


写真10 天井排気口

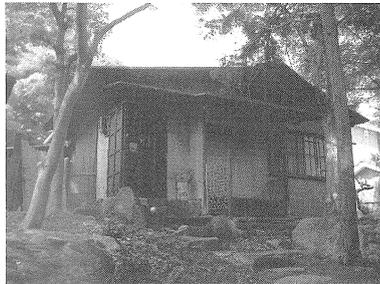


写真11 閑室

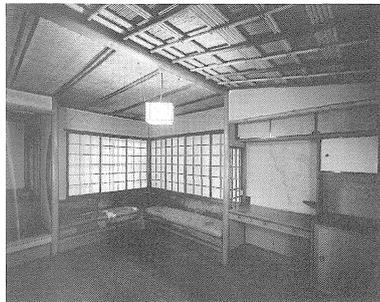


写真12 閑室

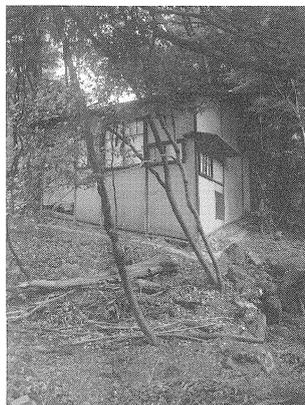


写真13 茶室（下閑室）

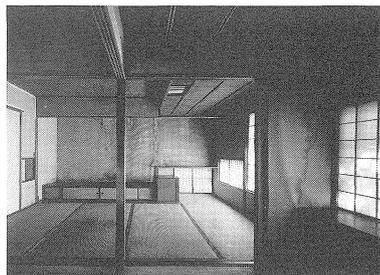


写真14 茶室（下閑室）

用の地窓を開放して緑によって冷やされた外気を入れ、天井部分に設けられた排気口（写真10）によって屋根裏に抜くことによって暑さを凌ぐことができる。一方、冬は「サンルーム」として窓ガラスを密閉し風雨を防いだ上で、日射から得られる熱（ダイレクトゲイン）による採暖効果が得られるのである。

#### 閑室（写真11, 12）

閑室は「聴竹居図案集」<sup>4</sup>によると、「腰掛式を本位として閑寂を楽しみ得る室にて茶礼をも行い得ること」を考慮してつくられた。平面的には、玄関から便所、下段の間、上段の間へと正方形が執拗に反復されている。また、意匠的には、柱に丸太を用いたり、駆け込み天井などの数奇屋風のデザインがなされている。とりわけ、網代や萩、皮付き丸太などを用いた饒舌な天井は、本屋のシンプルなデザインとは対照的である。小さいながらもヒューマンスケールの居心地の良い心落ち着く小住宅となっている。

#### 茶室（下閑室）（写真13, 14）

閑室よりひとまわり小さな茶室（下閑室）は本屋からの視界をさえぎらないように南東に4mほど落ち込んだ所に位置している。それはまるでフランク・ロイド・ライト設計の落水荘（1936年竣工）のように小滝とその下の池に続く傾斜地に建っている（図4）。外観は大壁造りの本屋や閑室とは異なり数奇屋風の真壁造り。窓は外観よりは内部空間からの見え方を重視し配置されたため、ユニークなエレベーションとなっている。さらに屋根の多様さにも驚かされる。わずか6m半四方の建物であるが各室ごとに屋根形状を切り替えている。内部空間には、ガラス戸の入ったにじり口のある2畳中板の茶室、市松状の窓に面した備え付けの机のある板の間、そして、6畳の広さに竿縁と交差して宙を飛ぶダイナミックな落とし掛けのある4m巾の床の間をもつ閑室がある。いずれも本屋や閑室にはない斬新なものとなっている。本屋や閑室は、“普遍的な理想の

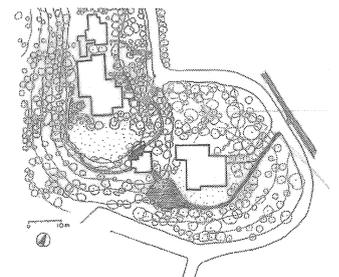


図4 聴竹居と第3住宅

モデル”としてある意味優等生的につくられ、図案集にも残している。一方、下閑室は公表されていない私的な建物であり、本屋や閑室とは異なった藤井の嗜好の一面が表現されている。藤井を知る上で極めて重要な建物と言える。

#### ディテール（写真15, 16, 17, 18）

「統聴竹居図案集」<sup>5</sup>には竣工写真とともに、理論書である「日本の住宅」<sup>6</sup>と連動した形で、特に外部に面した建具廻りの原寸図と主要な部屋の展開図が数多く紹介されている。

実際の「聴竹居」は竣工後70数年経ているにもかかわらず、建具等にほとんど狂いが無い。さらに、実測調査で窓ガラスの木製押さえぶち等の釘のピッチもきちんと割り付けられ、召し合わせ部分には隙間風を防ぐ工夫も施されていることが分かった。藤井によって建物から家具や照明にいたるディテールの隅々までデザインされ、そのすべてが住み込みで建設にあたった棟梁・酒徳金之助との共同作業によって精緻に具現化されているのである。

床は板貼、天井には杉板、杉へぎ板や竹の網代も用いられているが、居室の天井を含め内壁のほとんどが鳥の子紙で包まれている。細く精緻なディテールをもつ建具と極めて限定された色や材料で空間を構成。あらゆる展開の直線が垂直、水平方向をきちんと揃えられ、その上で、幾何学的な円や円弧、斜めの線が空間にアクセントを与えている。それが藤森照信氏の言う「伝統を幾何学で洗う」<sup>7</sup>ことであり、空間にモダンな感覚を生んでいる。

#### 【理論書「日本の住宅」と実践としての「聴竹居」】

京都帝国大学教授・建築家の藤井厚二は、明治維新以来の欧化政策により欧米の模倣と日本の伝統とがただ雑然と混交している生活様式の状況を憂い、環境工学の理論書「日本の住宅」（1928年岩波書店）（写真19）を執筆・発行している。

その本の中で和風・洋風の二つの様式について、「生活様式」「構造および意匠装飾」「間取り」「壁」「軒および庇」「夏の設備」など10項目について比較・考察し、それぞれの長所に拠った様式を追求した。そして、欧米諸国・都市と日本の気候データとの比較を行って、主に温熱環境について人間が快適である状態を明らかにした上で、それを獲得するための日本の住宅における基本的な考え方を提示し科学的に裏付けている。

環境が叫ばれる今でこそあたりまえのことが、80年も前に藤井によって自ら興した環境工学を基礎とした設計方法論として展開されるだけでなく、恵まれた財力を生かし五つもの自邸を建てながら理論を実践・検証し、最後の「聴竹居」において集大成しているのである。



写真15 ディテール

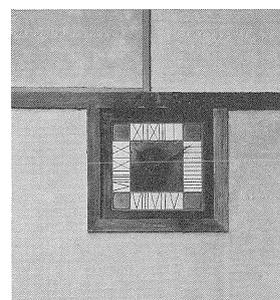


写真16 ディテール

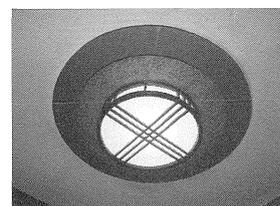


写真17 ディテール

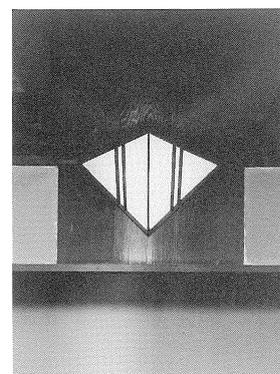


写真18 ディテール

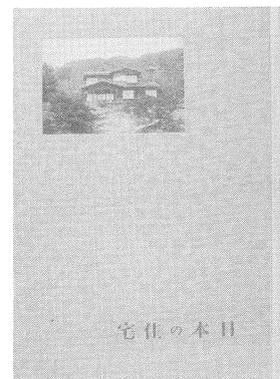


写真19 「日本の住宅」表紙

今日において環境共生住宅の原点とも言われる「聴竹居」の先進性を示す主なものは次の3つである。

①科学的アプローチを駆使したパッシブな（自然エネルギーを生かした）建築計画

・外壁の負荷軽減

木舞壁、土蔵壁、煉瓦壁、鉄筋コンクリート壁などさまざまな壁に太陽を直射させ、内部温度を比較するという実験を行い、その結果「聴竹居」では外壁に断熱性に優れる土蔵壁を採用している。

・明るさを取り入れつつ熱負荷を減らす工夫

南端の「縁側」（いわばサンルーム）は、大きな窓から外光を十分に採り入れた明るい開放的な空間になっている。庇の出を科学的に計算し、夏は部屋を閉め切り暑さの緩衝帯として、冬には居室と一続きにすることで、日射熱を直接取り入れ暖をとる（ダイレクトゲイン）役割を持つ空間となっている（写真20）。

②洋風と和風そしてモダンを統合したデザイン

現代の私たちの住む住宅地は国籍不明の住宅で溢れ、もはや洋風と和風についての問題意識を持つことすらなくなっている。その中であって「聴竹居」に出会うと、洋風と和風がみごとになまでに統合されたその素晴らしさに衝撃を受ける。藤井の試みたデザインは、時代の流行に押し流されることのない真摯な取組み「洋と和の幸せな統合」である。大きくは①椅子座と床座を融合させた平面・断面計画（椅子に座った人と畳に座った人の目線を合わせるために畳の床を30cm高く設定）、②数寄屋建築に用いられてきた自然系材料の採用、③黎明期にあった欧米のモダニズムと日本の数寄屋のデザイン融合の3つである。

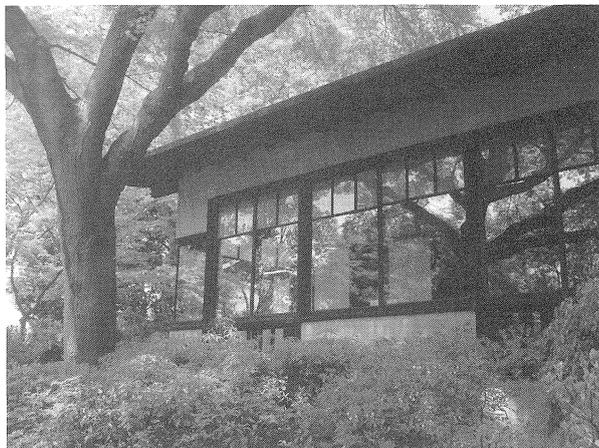


写真20 縁側外観

モダンな感覚でありながら何処か懐かしい雰囲気を持った独特のデザインは、時代を越えて我々に訴えかけてくる。

③住まいの“原型”としての居間中心のプランニング

長く住みつけられる住まいを実現するには時代を越えて引き継がれる可能性を持ったプランニングの“原型”を提示することが重要である。

「聴竹居」の平面（図3）を見ると、今で言うリビング・インであり、現代でも十分に通用するプランニングである。居間の周囲に繋がる食堂、客室、縁側、読書室にそれぞれ実際に身を置くと不思議に落ち着く。藤井はおそらく居室を中心に貫入・連続された空間全体で、人が集う場としての「居間」を実現しようとしたのだろう。家族それぞれが居場所を確保しながら繋がりがあえる豊かな空間が生まれている。

## 2 藤井を「住宅作家」へと導いた環境と先人との出会い

【審美眼と思想を育んだ教育環境 第一級的美術品と伊東忠太との出会い】

「聴竹居」を設計した藤井厚二はどのような環境で育ったのだろうか。藤井は1888（明治21）年12月8日、現在の広島県福山市宝町に素封家の次男として生まれている。父与一右衛門は、十数代続く造酒屋・製塩業・金融業「くろがねや」を営んでいたかつての御用商人。藤井家は堅実に家業を営む傍ら円山応挙「瀑布亀」、竹内栖鳳「薰風行吟」、「御所丸茶碗」をなど第一級の絵画、書、茶道具を数多く所蔵、藤井は幼少の頃から日常的にそれらを目にしている。建築家・藤井厚二の鋭い審美眼は、海と山に囲まれた福山の豊かな自然環境と、この恵まれた家庭環境によって育まれていった。福山中学（現在の福山誠之館高等学校）を経て、1910（明治43）年、岡山の第六高等学校を卒業。1913（大正2）年、東京帝国大学工学科建築学科を卒業する。

卒業設計は中央にドーム状のロトンダをもった「A Memorial Public Library；記念公共図書館」を残している。様式建築的でありながらも新古典主義を志向したデザインである。一方大学では「法隆寺建築論」を発表した日本初の建築家であり、「平安神宮」や「築地本願寺」を設計した建築家・伊東忠太に教わっている。西洋化一辺倒から脱し日本独自の様式建築を生涯追い求めた伊東の思想に大きく影響を受けている。その証として「聴竹居」の入口にちょうど藤井が大学に在籍していた1912（明治45）年、西本願寺の別院「真宗信徒生命保険会社」のために伊東忠太がデザインした「怪獣」の彫刻が置かれている（写真21）。この「怪獣」は、藤井の3回

目の実験住宅の庭にも置かれ、「聴竹居」の設計図面の立面図にも描かれているのである。

#### 【ふたつの朝日新聞社関連の設計業務を通じての武田五一との出会い】

当時設計技術の近代化を急いでいた竹中藤右衛門が三顧の礼で迎え、1913（大正2）年、合名会社竹中工務店最初の帝大卒設計課員として入社する。

入社間もない時期に取組んだふたつのプロジェクトが藤井の将来を決定付けることになる。「大阪朝日新聞社社屋」1916（大正5）年（写真22）と「大阪朝日新聞社 社主 村山龍平邸・和館」1917（大正6）年（写真23）である。前者は東京帝国大学で学んだ欧米の建築技術を、遺憾なく発揮して出来上がった先進的な「オフィスビル」。一方後者は約1万坪にも及ぶ起伏ある広大な敷地を存分に生かしたランドスケープと、石田潤一郎先生の言う「和風のゼツェッション化」が特徴的な「住宅」（邸宅）。若き藤井厚二には、いずれも魅力的なジャンルであり、実践の中で様々な建築設計の知識を吸収する場であった。

しかし、後に竹中工務店を辞めた藤井は、「住宅」（と環境工学）を選ぶことになる。それは、時代的にゼツェッション的な傾向があったとはいえ、まだまだ様式建築のスタイルに縛られ、国家の「西洋化」の意思を表出する必要があった「オフィスビル」よりも、欧米では既にモダニズムの萌芽が始まりデザインの自由度を増しつつあった「住宅」に、より魅力を感じたということだろう。

さらに藤井のその後を決定的にしたのは、「大阪朝日新聞社社屋」プロジェクトの新聞側の顧問を務めていた関西の雄、建築家・武田五一に出会っていることだ。

武田は藤井とは16歳違いで、同じ福山出身である。当時京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）の図案科教授であった武田は、「福島行信邸・1907年」や「京都府記念図書館・1909年」、「芝川又右衛門邸・1911年」（写真24）と言ったヨーロッパで生まれたアールヌーボーやゼツェッションなど近代主義の建築に向けた新しいデザインの潮流を積極的に吸収した作品を次々に発表していた。また、日本の建築家としてはいち早く「茶室」に注目し、卒業論文のテーマに選んでいる。さらに、フランク・ロイド・ライトに1905年に会い、1916年には、「ライト図案集」をまとめ、ライトをいち早く日本に紹介した一人である。入社したての若き藤井厚二には、油の乗り切っていた40代半ばの武田五一の強烈な個性とその行動は大きく影響しただろう。そして1920（大正8）年、藤井は武田が創設した京都帝国大学工学部建築学科に講師として招かれ「意匠製図」（後に「建築設備」「住宅論」「建築計画論」）を担当、翌年助教授となる。



写真21 伊東忠太デザインによる「怪獣」



写真22 「大阪朝日新聞社社屋」1916（大正5）年



写真23 「大阪朝日新聞社 社主 村山龍平邸・和館」  
1917（大正6）年

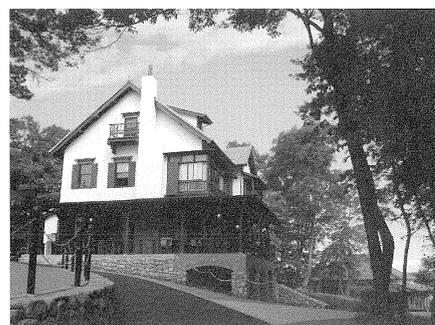


写真24 「芝川又右衛門邸」1911年

### 3. 藤井が建築思想を形成した時代背景

【藤井が「建築思想」の骨格を固めた 1910～1920 年代と言う時代】

藤井厚二が東京帝国大学を卒業し、竹中工務店に入社し、自らも研鑽を積みながら当時近代化を急いでいた設計部の基礎を築き、退社後、欧米視察に出かけたのが、ちょうど 1910 年（明治 43 年）から 1920 年（大正 9 年）に掛けてである。

では、藤井の「建築思想」の骨格を固めたこの 1910 年代とは、建築史的にはどういった時代だったのだろうか。

建築史家の藤森照信は、「建築 20 世紀 新建築創刊 65 周年記念号」（1991 年 新建築社）の中で、この時代を「歴史家としての好奇心から言うと、これくらい面白い時期もない」とした上で、「以上が、1910 年代の概観である。さまざまな流れが登場するカオスのような時期にほかならないが、その造形に共通した性格を探せば、全体構成あるいは部分意匠における『幾何学的傾向』であろう。表現派のような一見幾何学からは遠い表現でも、その曲線の動きはアール・ヌーヴォーの流動曲線に比べるとはっきりと幾何学化しているし、表現派の細部意匠に幾何学的文様を探するのはさして難しくない。この幾何学的傾向は、やがて後の 1920 年代に入ると二つの方向をはっきりさせ、幾何学を全体構成の原理とするインターナショナル様式と幾何学を細部の装飾原理とするアール・デコ様式が生まれるであろう」としている。

藤井が実現した「聴竹居」をはじめとした住宅のデザインには、まさに「幾何学」がその中心に存在している。同時代を生きた同年生まれの建築家・リートフェルト（1888～1964）も、幾何学的抽象絵画のモンドリアンを連想させる「シュレーダー邸」を 1924 年に完成させている。まさに現代時代の建築のルーツ「モダニズム建築」は、それまでの様式建築を「幾何学」によって構成することで、新しい世界に通じる様式を生み出そうとする動きだったのである。

【「日本の住宅」を実現する為に古今東西のあらゆるものを貪欲に吸収】

建築物、図面、論文、著書以外には資料が乏しく、藤井厚二の思想や行動についての全貌を捉えることはなかなか難しい。

竹中工務店を退職した直後、1919（大正 8）年と翌年にかけて武田五一の薦めにより「建築に関する諸設備および住宅研究」のため欧米を視察、藤井はモダニズムデザインの萌芽と最先端の建築設備を目の当たりにする。その成果は、建築家・マッキントッシュの設計した住宅「ヒルハウス」（写真 2 5）にある壁埋め込みの時計のデザインを参照した「聴竹居」の時計（写真 1 6）や、ドイツから輸入した電気冷蔵庫（写真 2 6）等に



写真 2 5 建築家・マッキントッシュの設計した住宅「ヒルハウス」の時計

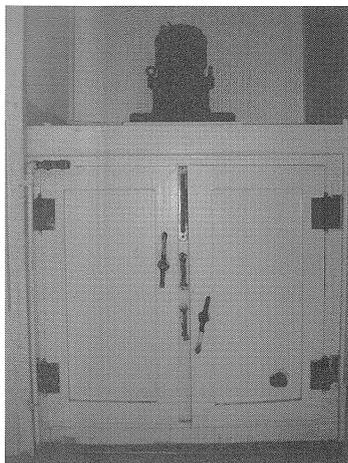


写真 2 6 ドイツから輸入した電気冷蔵庫

みてとれる。

一方で、今般「聴竹居」に残された藤井の資料の中から藤井が日本の伝統的な建築についても、かなり詳しく調査していた遍歴を示すものがふたつほど見つかった。

ひとつは、京都帝国大学に着任した藤井が「法隆寺」「東大寺」「唐招提寺」「室生寺」などを10日ほどかけて、写真撮影をしながら調査していた旅程メモ(写真27)。今ひとつは、ブルーノ・タウトが1933年来日し絶賛し注目された「桂離宮」や「修学院離宮」の写真資料である。また、「茶室」に関して、古文書を収集するとともに千利休の茶室「待庵」を実測するなど詳細な研究をしていたことが明らかにされている(「知られざる名作 もうひとつの閑室をめぐって」西澤英和 S D 2000年9月号)。これらの数多くの第一級の「古建築」視察・実測・写真撮影等の作業を通じて、永い年月を経て日本の気候風土に適応してきた日本の建築のあり方を貪欲に吸収していた姿が浮び上がる。

#### 【関東大震災により開眼された「日本の気候風土・習慣に適合した建築」への意識】

明治維新以降、日本は、欧化政策のもと数多くの洋風建築を建ててきた。それらの多くが一瞬にして倒壊した関東大震災。その光景を藤井は震災後3週間の時点で視察し、親交のあった建築家・片岡安が初代理事長に就任し1917年に創立された関西建築協会(現在の日本建築協会)の機関誌「建築と社会」に一文「関東の震災を見て」(大正13年(1924年)1月)を記している。

巻頭で「平素建築上に抱いている考を一層深くした」と述べている。文中から藤井の「考」を引用してみる。

「吾々の建築は他を模倣したものでなくて、我国の気候、風土、習慣に、ピッタリと適合したものでなければならない」

「無条件で外国の建築を受け入れたものが、我国の気候風土に対して、如何なる結果を齎すかは、申迄もなく明らかなことです。」

「吾々が建築上手本として、参考として居る国々、米国でも、英吉利でも、独逸でも、何れも日本よりは余程北に在って、冬を主として考えなければならないし、我国は夏を主として考えなければならないと云う様に、全く反対です。」

「従来の建築に就いての考え方は、余りに美的方面に対してのみ意を注ぐ弊に陥って居り、且つ歴史に捉われ過ぎた傾向があるように思います。これは甚しい弊害を伴うものですから、もっともっと、構造設備の方面に注意し、完全な建物を造る様に期せなければならないと同時に、古い建築の様式から全く眼を離して、将来の新しい建築に就いて、考えなければなりません。」

「建築学はもっと工学的と云いましょうか、実際的にならないといけないと思います。」

「吾々は嘗て先輩から建物を設計する時には、欧羅巴の古建築を参考とし、手本とせよと常に聞かされましたが、其手本となることは、僅かに一小部分であって、建築として最も重大なる点の、構造や設備に対しては殆んど参考になりません。」

「現代の科学は細かく分類して研究されて居るので、深く進歩して行くのでしようが、大體を総括して考える場合は少なく、これが為に実際に応用した場合に於て、意外の結果を招く様なことが、屢々起こります。」

「要するに建物を造る場合には単に一方面のみに気を取られないで、種々の方面に対して充分に顧慮する必要があると思います。」

藤井は、数年前に欧米視察を終え、京都帝国大学に着任して間もない時期に「関東大震災」における洋風建築の被害を眼のあたりにし、より深く「日本の建築」を意識することに繋がったのである。

#### 4. 自然環境と生活文化を起点にした「住」の美意識

##### 【西川一草亭との出会い 日本文化を特質づける生活文化への傾倒】

藤井は生花を壽子夫人とともに西川一草亭に学んでいる。

西川一草亭は、「洋花を大胆に取り入れた小原雲心の盛花の形式主義にとらわれ、自然を対象化して色彩を重視する主張を批判し、自然の心に随って、自然の主体性を表現する花を標榜していた」(「1930年代・西川一草亭 中村利則 淡交 No.478 1986年5月1日発行」)。1926年(大正15年)西川は、枯渴する学究達に“日本的なもの”への傾斜を促し、日

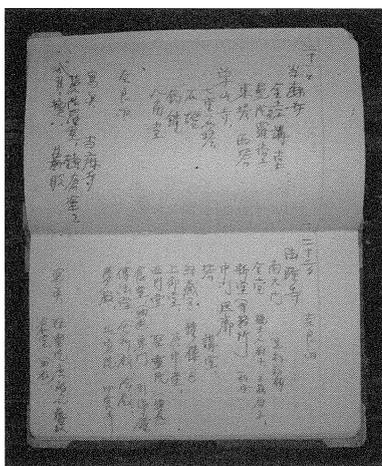


写真27 旅程メモ

本文化を語り合うサロンを提供する庵居「去風洞」を開いた。そこには、夏目漱石、富岡鉄斎、浅井忠をはじめ多くの文化人・知識人が集っていた。流の機関誌が「瓶史」であり、藤井も「床の間」の論考を寄せている（1931年3月20日）。

その中で西川の講和を引用しながら以下のように綴っている。「『つまり生花の要領は何であるかと云いますと、私は結局少しの物を生かして用いると云う事に帰するだろうと思えます』とありますが、之は現代のすべての道に対する要点で、（中略）建築に於ても、僅かな材料を適当に使用して、最も大なる効果をあげればそれでよい訳ですが、（中略）何も置かないで、単に花器に一枝の花を挿して置くのみで、高雅なる気分の横溢するような床の間の造らざることを切に希望いたします」。

藤井は、「床の間」が西洋の暖炉と対照して日本の住宅建築では室内の中心とした上で、空間に変化を与える為に「最も効果のある方法は、平面で区画した種々の凸凹のある空間を造ることで、即ち畳の一枚分或いは二枚分の面積に於て、床の間を設ければ、種々の面白い変化を与えます」としている。さらに、床の間の歴史に触れた後、「現今の普通の住宅で造られている床の間は面白みが少しもなくて、一定の型にはまって、極めて単調に陥り冷たい感を与えるものが多く、隅々の変化を求めたものは複雑で騒々しい感を与えます」とし、具体的な欠点として、「一般に使用する材が太すぎることに」、「使用する材料そのものの性質と他との関係について不注意であること」をあげている。

藤井は「日本の住宅」の空間として「床の間」の重要性を主張すると同時に、西川一草亭に学んだ「簡素で豊か」という基本的な美意識を提示しているのである。藤井厚二と親交の深かった堀口捨巳もまた西川一草亭と出会い、協同で住宅の設計にあたっている。「分離派を興し、近代建築運動の旗手でもあった堀口が、この1930年代に、数寄屋の本質に非古典性と反古典性の存在を知り、近代美意識に通底する民族主義へとゆれうごく。この変容の分節に一草亭を忘れてはならない。やがて堀口は『利休の茶室』に代表される茶室研究を大成し、また夭折した藤井厚二を継いで、日本住宅の正道を確立する。その藤井と堀口の間に一草亭がいる。」（「1930年代・西川一草亭 中村利則 淡交No.478 1986年5月1日発行」）。

「日本人が、日常的な、身のまわりのものに美を見出し、それを芸術形式に仕立てるといふ、ある意味ではスケールの小さい、しかし文化の形式からいうともっとも先取りした形のものを生み出した（中略）日本人が生活を様式化し、あるいは生活のなかに様式美を見出した最初は、文字通り生活の場である座敷の美学の発見にあったといえると思う。」（「生活における日本の様式美」村井康彦 「日本人 住まいの文化誌」ミサワホーム総合研究所編 1983年）。明治になる前の日本には、豊かな

自然が織り成す四季の変化と呼応しながら、日常の生活の中に（まさにそれは住空間）、美を見出し芸術形式に仕立てる「花」、「茶」をはじめとする生活文化がしっかりと根付いていたのである。「花」や「茶」を通じて日本文化の特徴が生活文化にあることを藤井は学び、「住空間」に対する美意識を確かなものにしていったのだろう。

#### 【生活全体をデザインした藤井 「日本の住宅」の美意識】

1996年のある夏の暑い日に初めて「聴竹居」を訪れた時に、「日本に適した住宅のデザインとして、こんな解決方法があったんだ」と感じた。和風でもなく、と言っても洋風でもなく、80年の時間を越えても日本人の我々の感覚に適合した住宅として存在する。

こうした感覚は、何処から来るのだろうか。

それは、藤井が「茶」「花」そして「陶芸」を嗜む中で、あくまで日常性の生活の中に美を見出していたことにヒントがあると思う。日本人は古来から恵まれた自然の織り成す四季の変化に美を発見し、衣・食・住に取り込んできた。京都や奈良の古建築、世界のモダニズム建築の潮流を十分に探求していた藤井には、この美意識こそが、世界に通じる「日本の住宅」創造の起点になると確信していたのではないだろうか。

事実、藤井は、大山崎の約1万2千坪の広大な敷地に3～5回実験住宅以外にも小住宅3軒、大工小屋（住みこみの大工）、車庫（運転手を雇ってオペルを愛用）、窯（「藤焼き」と名づけた陶芸）、プール（25m×6m コンクリート製の本格的なもの）、テニスコートなどを設ける（図1）とともに、地下水を汲み上げた簡易水道による小川や滝、水車のある傾斜を生かしたランドスケープも実現し、建築だけではなく、家具、照明、絨毯、陶器（写真28）、自著の装丁など生活のあらゆるものをデザインしているのである。



写真28 藤焼の湯のみ

## 5. 藤井厚二「聴竹居」が現代へ問いかけること

私自身「聴竹居」に1996年に出会って十数年。昨年春からは地元・大山崎町の有志の方々と共に保存活用をはじめ、より積極的に関わるようになった。この1年四季を通じて何度も通い、数多くの見学の方々から感想を伺ううちに意を強くしたことがある。

「聴竹居」に佇む。とても、居心地がよい。心も体もとても癒されるのだ。

昨今は特に環境共生住宅の原点とも言われているが、現代建築とは異なり、環境技術（個々の要素技術）が決して表に出ることもなく、ディテールまで拘った和と洋そしてモダンなデザインの中に完全に溶け込んでいる。

藤井の目指したもの、それは「我国独特の住宅建築様式を確立する（の刺戟ともならば、洵に望外の幸です）」（聴竹居図案集）だった。そのために、環境工学の理論書「日本の住宅」（1928年）、さらに住宅設計の集大成・完成形として写真と図面で構成された「聴竹居図案集」（1929年）、「続聴竹居図案集」（1932年）を著し、理論と実践の成果を書籍として世に発表している。そして、驚くことに1930年には明治書房から、この3つの書物を統合し英訳した「THE JAPANESE DWELLING-HOUSE」を発行し世界へ発信しているのだ。

しかし、自身の住宅思想・理論の完成形とした「聴竹居」に住んでわずか10年でこの世を去り、藤井の目指したものは道半ばで尽きる。藤井が短い生涯で設計し現存する住宅が規模の大きいものばかりであるために「豪邸ばかりを設計した」と誤解されているが、実は、「聴竹居」を訪れた客人に延べ15坪～19坪と言った小住宅のプラン集「住宅に就いて」（写真29）を配布していた。それは、藤井の志向した「日本の住宅」を普及させんがための方策のひとつだった。

現代の住宅は家電製品をはじめ溢れるばかりのあらゆるモノ、そして、様々な情報に専有されている。しかし、がらんとした「聴竹居」に佇んでいると、西川一草亭の言葉「少しの物を生かして用いると云う事に帰する」を思い起こし「これでいいんだ」と思えてくる。戦後の日本は、人間社会の繁栄と進歩の目標として「経済成長」を唯一の是として右肩上がりで行進できた。しかし、住宅ひとつを例にとっても現在の我々の住む住宅をはじめとする住環境が少しでも戦前の藤井の生きた時代から進歩したのであろうか。むしろ、退化しているのではないだろうか。豊かさと思わされていることを獲得する一方で、大事なものを知らずに失ってきたのではないだろうか。

ゆったりとした時間がながれ、豊かな自然に抱かれ、空間が息づいている「聴竹居」。

いま、本当に考えなければならないことは、「簡素で豊か」を、

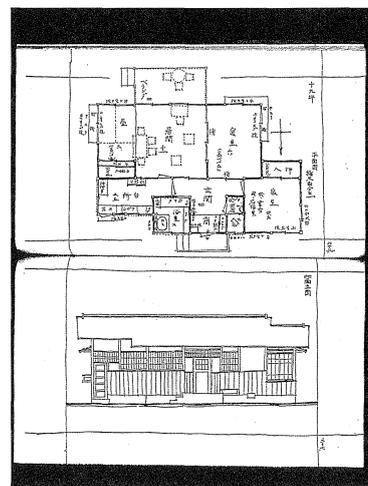


写真29 小住宅のプラン集「住宅に就いて」



写真30 聴竹居新緑コンサート風景

人間形成の基本単位である住宅そして生活文化に取り戻すことではないだろうか（写真30）。

「衣」「食」「住」を「住」を第一位に入れ替え、藤井厚二の遺した名言「其の国を代表する建築は住宅建築である」を真摯に再考することからはじめなければならない。

#### 参考文献

- [1] 藤井厚二「日本の住宅」岩波書店 1928年
- [2] 藤井厚二「聴竹居図案集」岩波書店 1929年
- [3] 藤井厚二『純聴竹居図案集』田中平安堂 1932年
- [4] 藤井厚二『床の間』田中平安堂 1934年
- [5] 横山正「住宅の50年」『昭和住宅史』新建築社 1976年
- [6] 小能林宏城「大山崎の光悦」『昭和住宅史』新建築社 1976年
- [7] 中村利則「淡交 No.478」『1930年代・西川一草亭』1986年5月1日発行
- [8] 石田潤一郎『『日本趣味』の空間—藤井厚二論序説』セゾン美術館「日本の眼と空間もうひとつのモダンデザイン展」図録 1990年
- [9] 石田潤一郎「聴竹居」『現代和風の住宅』学芸出版社 1991年
- [10] 藤森照信「建築20世紀 新建築創刊65周年記念号」新建築社 1991年
- [11] 藤岡洋保「聴竹居の今日的意味」『SOLAR CAT』20春号 1995年
- [12] 竹中工務店「芝川邸と武田五一展」図録 1996年
- [13] 大川三雄+川向正人+初田亨+吉田鋼市 図説「近代建築の系譜」彰国社 1997年
- [14] 竹中工務店「特集 聴竹居」季刊『アプローチ』冬号 2000年
- [15] 西澤英和「知られざる名作 もうひとつの閑室をめぐって」SD 2000年9月号
- [16] 竹中工務店設計部編「環境と共生する住宅 - 聴竹居実測図集」2001年 彰国社
- [17] 松隈章「聴竹居が現代に問いかけるもの」ふくやま美術館展覧会図録 2004年
- [18] 松隈章「藤井厚二の聴竹居に学ぶ」住宅建築 2005年1月号
- [19] 松隈章「INAX REPORT」『特集 生き続ける建築—7/藤井厚二』2008年
- [20] 松隈章「チルチンびと49号」『聴竹居と日本の夏』風土社 2008年

#### 注釈

- 1) 小能林宏城「大山崎の光悦」『昭和住宅史』新建築社 1976年
- 2) 竹中工務店設計部「環境と共生する住宅『聴竹居』実測図集」彰国社 2001年
- 3) 藤井厚二『床の間』田中平安堂 1934年
- 4) 藤井厚二『聴竹居図案集』岩波書店 1929年
- 5) 藤井厚二『純聴竹居図案集』田中平安堂 1932年
- 6) 藤井厚二『日本の住宅』岩波書店 1928年
- 7) 藤森照信『日本の洋館 第5巻 昭和篇I』講談社 2003年